

文学，言語，伝統：滞日期ポール・クローデルの講演活動

学谷，亮
中京大学教養教育研究院：准教授

<https://doi.org/10.15017/7162044>

出版情報：Stella. 42, pp.143-163, 2023-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

文学，言語，伝統

——滞日期ポール・クローデルの講演活動——

学 谷 亮

ポール・クローデルが1921年（大正10年）11月にフランス大使として来日するにあたり、外務大臣アリストイッド・ブリアンは彼に「訓令」を与えている。そのなかに、次のような一節がある——

当地には、その献身と行動によってフランス語の普及を行ってきた宣教師や教師がおり、貴公の活動の助けとなるだろう。我が国の学校の活動を維持し発展させることはきわめて重要である。我が国の言語、文学、学問にかんする知識をいっそう広める努力をするにあたり、貴公にはとりわけ優れた資質がある。〔…〕

貴公は、我が国の学校の維持と発展、手持ちのプロパガンダ手段の使用、フランス語書籍の流通と日本人学生の来仏促進を行いながら、我が国の言語にしかるべき地位を与えるよう努力しなければならない。¹⁾

一読して明らかのように、これは所謂「文化外交」についての記述であり、フランス語を中心として、日本でフランス文化を普及させることが要求されている。経済・通商分野を得意とする外交官であったクローデルがこうした点にかんして「とりわけ優れた資質がある」というのは、彼がすでに作家としての名声を獲得していたことを意味していると考えられよう。

実際、クローデルの来日が決定すると、当時の日本人は彼を「詩人大使」と呼び、全国紙の見出しにはほとんど毎日のようにこの呼称が記されることになった。単なる「大使」ではない、「詩人大使」としてのクローデルの資質が最初に発揮されたのは、来日翌年にあたる1922年（大正11年）に行われた一連の講演活動においてである。これらはいずれも文化にかかわる演題であったため、聴衆に語りかける彼は、一国の大使であると同時に、「有数の文学者」²⁾や「仏国近代の象徴詩人の巨壁」³⁾として聴衆の眼に映ったことだろう。「大使」と「詩人」の二重性がクローデルの対日政策にどのような影響を与えたのかについては、未だ明らかになっていない点が少なくない⁴⁾。その意味で、これらの講

演を分析することは、その愛称だけが一人歩きしている感のある「詩人大使」としてのクローデルの実態に迫るうえで有効だといえよう。

本稿は、行われた場所も、想定されている聴衆も、そして中心をなす主題もそれぞれ異なっている 1922 年の 3 つの講演を読解する。それによって、クローデルが「詩人」としての自らの名声をいかにして「大使」としての任務に活用したのか、その一端を明らかにする。まず、1 月の講演「フランス文学について」を取り上げ、そこで「フランス的精神」がどのように定義されているかを分析する。次いで、5 月の講演「フランス語について」において、前述の「フランス的精神」との関連からフランス語の「国際性」がどのように論じられているかを考察する。最後に、8 月の講演「日本の伝統とフランスの伝統」において、フランスの対日宣伝の一環であったはずの本講演でなぜ「日本の伝統」が前面に押し出されたのかを論究する。

講演「フランス文学について」における「フランス的精神」

1922 年 1 月 15 日、上野精養軒において、クローデルの歓迎会が催された。プレイアド版『日記』の註に掲載された当日のプログラムによると、第 1 部では日本側関係者の歓迎演説といくつかの講演があり、クローデルの作品朗読と音楽会が行われた。続く第 2 部として、東京外国語学校の学生が『1914 年、降誕祭の夜』を上演した⁵⁾。第 1 部においてクローデルが行った講演が、「フランス文学について」である。

冒頭、クローデルは出席者に対し、「深い感謝の念と、作家ポール・クローデルをフランス大使として受け入れてくれたことの喜び」⁶⁾を表明している。これは、「此恩恵ある国の大使が詩人であり、文壇の驍将である事は我々の稀なる幸福で、日仏親善は之より政治に外交に殊に文化的に密接の度を加へること、信じ我々は衷心大使を歓迎する」⁷⁾という、東京帝国大学教授の杉山直治郎による開会の辞に対する返答であろう。同時に、外交官というよりもむしろ作家としての自分に期待が寄せられているのだという、自己認識に基づいているともいえよう。実際、彼の日本赴任が報道されて以降フランス文学への関心は高まりを見せており、この歓迎会も東京帝国大学をはじめとする都内大学の仏文科が中心になって企画したものである⁸⁾。

したがって、クローデルが自身の歓迎会での演題としてフランス文学を選ん

だのは、半ば必然であったと言えよう。日本人が自らに最も期待しているのは文学について語ることであるのを、彼はよく理解していたに違いない。しかし、この講演がフランス文学の「愛読者」たちを喜ばせたかどうかは疑わしい。「このわずかな時間で、あなたの方前で我が国の文学を完全に一望してみせることができたなどという、大それたことは思っておりません」⁹⁾と述べられているように、もとよりこの講演はフランス文学史を体系的に論じるものではなく、具体的な作品が分析されることもない。かと言って、クロード自身自身の文学体験や、他の作家との交流についても全く語られぬまま終わる。しかも、彼はただちにフランス文学について語り始めるわけではなく、そもそも文学の目的とは何かを示すことからこの講演は始まる――

文学とは、皆さんご存じの通り、単なる暇人の愉しみでも、人間の夢を蒸発させたものでも、小手先だけで音節を並べ立てたものでもありません。文学は、科学と同じように、我々の精神にとって必要不可欠な欲求に答えます。それは、今あるものにせよ過去のものにせよ、我々を取り巻く事物が織りなす光景に、ある秩序を生み出すというものです。[...] 文学の第一の目的は、何よりもまず、絶え間なく流れゆく状態にあるこの世界を固定することにあります。つまり、我々の捕獲を逃れるこの流動的な環境を、精神が時間をかけて観察できる一枚の恒久的な絵画に置き換えることなのです。第二に、この絵画を画するのです。それはつまり、秘められた関係性を示していると思われるような、そして私が形象と呼ぶものを形作っているようないくつかの事柄を、それらの周囲前後にあるものから分離することです。そうした事柄の多様性から、精神が一目で把握できるような統一性を作り出すようにします。そして最後に、作家が、あるいはより正確にはギリシャ語の語源に従って詩人や創造者と呼ぶことになる者が、この絵画の内部で発揮する技があります。それは、本質的なものを目立たせること、そして、この光り輝く点のあたり一面に、相互に従属し合うあらゆる種類のニュアンスと陰影とを巧みに分配することです。そうしてひとつの意味を構築し、最終的には、初歩的で粗野な筆触で描かれた現実には代わって、組織立った真実を完全に表現するのです。感覚によって根拠づけられた光景から、精神によって消化できる意味が抜け出し出てくる、すなわち、世界が解読可能なもの (lisible) になるのです。¹⁰⁾

ここでは文学の「目的」が、3つの段階に分けて記述されている。まず、流動的な状態にある現実の「世界」を「固定」する、すなわち外界を把握することから始まる。「一枚の恒久的な絵画に置き換える」という比喩からも明らかなように、この段階ではまだ言語は介入しておらず、単に外界のある範囲に限定して注意を向けるというものであろう。次に、この「絵画」の内部にある多様な

事柄の相互関係を整理し、そこに「統一性」を生み出すという過程がある。そして最後に、そのなかで「本質的なもの」を中心に据え、それ以外のものを「ニュアンス」や「陰影」に従って配置する。これは作家の、より正確には詩人の手による「創造的行為」に外ならない¹¹⁾。こうして、流動的な現実世界を基点として、そこから「意味」や「真実」が抽出されるのである。かくしてクローデルは、「文学の目的とは、我々に読む術を教える (nous apprendre à lire) ことにあるのです」¹²⁾ という、一応の結論にたどりつく。

しかし、そうした一般的な次元での文学論は、この講演の主題であるフランス文学とどのように関わるのか。言語という手段によって生のままの世界を整理・統一し、「意味」を現出させることこそが文学の営みであるとクローデルは言う。つまり文学とは、世界の創造的な秩序づけに外ならないのだが、そうした秩序づけを学ぶうえで最も適しているのがフランスの書物だという点にこそ、彼の主張の眼目がある――

我々が読む術を学ぶのは書物においてです。フランスの書物は世界のありとあらゆる人々から等しく人気を集め、他の言語で著された書物よりも、あらゆる年代、階層、時代の人々から求められているのですが、その要因は、そうした書物の著者たちの才能や、彼らが討議する論題や描き出す光景の魅力や多様性、面白さだけでなく、フランスの書物がもつ一般的な性質にあるのだと考えねばなりません。この性質とはつまり、他の言語で著された書物と比べて、フランスの書物が精神の滋養となるということ、光景を描き出すだけでなく方法を読者に提供するという、著者が一時実現した秩序に溶け合いながら秩序を生み出す術を読者に教えるということです。¹³⁾

ここで強調されているのは、フランスの書物の「一般的な性質」である。つまり、それぞれの書物が内容的な面白さや魅力を備えているだけでなく、その著者に導かれながら、読者自身が「秩序」を生み出せるようにするというのである。ここでの「書物」が文学作品を指すことは言うまでもない。というのも、文学の本質は「愉しみ」や「夢想」ではなく、世界を秩序づけ「解読可能」にすることにあるのだという、本講演冒頭の主張に合致しているからである。

このように、クローデルはフランス文学に潜むある種の实用性ないし教育的側面を強調するが、それは文学こそが「フランス的精神」を反映しているという考えに基づいていよう。ここで「フランス的精神」とは、「あらゆる局面で一般的なるものについて考え、原因ないし原理へと遡る」ことだと定義されてい

るが¹⁴⁾、「フランスの作家にとっては、常に描写することよりも説明することの方が重要だったのです」¹⁵⁾と述べられていることから分かるように、それはフランス文学のあり方に直結するのである——

〔…〕人間の精神は物質に対して権力をもつのだという原則、この地上は我々の動物的感情の働きだけでなく、我々の知性が使命として探し求めるべき秩序に適合したものであるという原則に基づかないのであれば、フランス文学は存在しないでしょう。我が国の文学から出てくる精神は喜びの精神であり、これは人間の心が持ちうるなかで最も高度な喜びなのです。すなわち、世界に意味があるがゆえに、世界は自分たちに属しているということに気がついた人間の喜びです。¹⁶⁾

ここでクローデルの提示するフランス文学観は、徹底した人間中心・知性中心の立場に立っている。文学という営みによって探求されるべき「秩序」は、「動物的感性」ではなく、「知性」が対象とするものなのである。それは、講演冒頭で提示された一般的な次元での文学観における、「感覚によって根拠づけられた光景から、精神によって消化できる意味が抜け出してくる」ことと同義ではあるまいか。知性によって世界を秩序づけ、そこから意味を引き出すという文学本来の営みに最も忠実なのがフランス文学だ、そうクローデルは考えているのである。

前述の通り、本講演は「詩人大使」の「詩人」としての側面に大きな期待を寄せる聴衆に向けられたものである。たしかに講演の主張は、クローデルが純粹に作家の立場から語った文学論と重なる部分が少なくない。例えば、彼がステファヌ・マラルメから学んだという「これは何を意味しているのか？(Qu'est-ce que ça veut dire?)」という問いについて語った「イジチュールの破局」の一節をみよう——

〔…〕この問いがマラルメにもたらずのは応答でも説明でもない。呪術的な略号である詩句という手段を用いた認証なのだ。それはあたかも科学者が、ある現象を説明したことになるのはその現象を図式的に描き出した時でしかない、と言わんかのごとくである。マラルメにとって詩句とは、感覚の領域 (domaine du sensible) から知性の領域 (intelligible) へ、事柄の領域から定義の領域へ、時間から永遠へ、偶然から必然へと現実を移行させ、堅固な数的組合せの中に現実を閉じ込めるために特に用いられる手段であった。それはつまり、眼前で作られるイメージを人間の息吹によってなされる創造で置き換えることであり、創造を通じて事物を模倣することなのである。¹⁷⁾

「マラルメが我々に教えたこの大いなる原理」¹⁸⁾と呼ばれる問いが、クローデルの文学観形成に少なからぬ影響を与えたことは疑いようもない。実際、「感覚の領域」から「知性の領域」へと現実を移行させ、感覚で把握された「イメージ」を「創造」へと置き換えるというのは、「フランス文学について」の冒頭で語られた内容と本質を同じくするものである。

しかし、この講演にはクローデルの文学論として何とも不自然な箇所がある。それは神の不在に外ならない。何より、このマラルメ論においては、「これは何を意味しているのか？」という問いによって得られるのが現実の「空虚な写し」に過ぎぬという欠点が指摘されている。そして、世界とは「別の何者か」、すなわち「世界の創造者」たる神の存在を想定することによって、マラルメの図式の修正が試みられるのだ¹⁹⁾。ミシェル・リウールは「我々を取り巻く事物が織りなす光景に、ある秩序を生み出す」という「フランス文学について」の一節を引き、「クローデルにとって、文学創造は同時に現実の法則に従うべきものであった」ことを指摘するが²⁰⁾、この「現実」とは「聖なる現実 (sainte réalité)」²¹⁾でなくてはならなかった。つまり、そこには常に神の存在が見出されていたのであり、それゆえ神を欠いたクローデルの文学論は片手落ちの感が否めない。

するとこの講演は、フランス文学について語ると見せかけながら、全く別の目的を有していたのではないだろうか。じじつ、クローデルは来日前に次のように語っていた――

私は数多くの電報を東京から受け取りましたが、そこには「フランス思想の代表者」を日本に迎えることができ非常に満足であると記されていました。

外交官よりも文学者としての私に向けられたこうした言葉は、おべっかが過ぎるように思えますが、それでもなお、心を打たれるものです。私のことは別にして、フランス文学は我が国の最も優れた輸出品のひとつであり、また友好国の人々に対するプロパガンダの手段としてより確実なものなのではないでしょうか？²²⁾

来日にあたって、自らが「大使」としてよりも「詩人」として注目されていることを肌で感じ取っていたクローデルは、そのことにいささか困惑しつつも、フランス文学が自らの対日政策の鍵になり得ると考えていたのではないだろうか。自国の文学を「輸出品」ないし「プロパガンダの手段」として用いることの第一歩が、フランス文学に強い関心をもつ親仏派の日本人に対し「フランス的精神」のイメージを宣伝する、この講演だったのである。

講演「フランス語について」におけるフランス語の「国際性」

1922年5月21日、クローデルは約1週間の関西旅行に出かけた。その主たる目的は、自らが壇上に立って講演を行うことにあった。言うまでもなく、これは大使としての公務の一環であり、じじつ、5月24日に京都帝国大学で行った講演の原稿が関西旅行の報告とともに外務大臣アンリ・ポワンカレへ送られている。まず注目すべきは、京大からの依頼が「1月に東京で行った学生向けの講演と同内容のもの」²³⁾であった点である。たしかに両者には共通する話題が少なくなく、一続きの講演と見なすことも可能であろう。

だが、東京の講演がフランス文学に強い関心をもつ層に向けられていたのに対し、京大に集まった「およそ2,000人の学生」²⁴⁾のなかには、文学に明るくない聴衆も少なくなかったと思われる。クローデルも、「京都大学は第二の帝国大学であるのに、フランス文学の教授がひとりもないのです」²⁵⁾と語り、東京に比べて、京都でのフランス文学研究・教育の遅れを指摘している。そのこともあり、彼はフランス文学を直接的な主題にすることを避け、より一般性の高い演題である「フランス語について」を選択したと考えられる。なお、関西滞在中、クローデルの講演は京大のほかにも2つの会場で行われた。25日には、馬淵鋭太郎京都市長の依頼により、岡崎の市公会堂で前日と同内容の講演を行った²⁶⁾。また27日には、同内容の講演を関西大学でも実施した²⁷⁾。

クローデルは「私は以前東京で学生たちに講演した際、フランス語がこのように完成されるに至った理由を説明しました」²⁸⁾と述べ、「フランス文学について」に言及している。例えば次のような箇所がそれに該当するであろう――

この時期〔16世紀末から19世紀初頭〕においては、この上なく複雑で繊細な思想や感情をフランス語によって表出せんがために何世代にもわたる努力が続けられたことにより、フランス語は今日世界中で使用が推奨されるだけの特質を、とりわけ明晰さを獲得したのです。²⁹⁾

古典主義の時代からフランス革命直後までの約200年間を「フランス的精神」の形成期ととらえるクローデルは、その時期にフランス語が「明晰さ」を獲得し、それゆえ全世界で使用されるに値する言語になったと述べている。ある言語が「明晰」たる条件として、彼は3つの点を挙げる。第一に「単語 (mots) の意味が明確である、謂わば公的・法的に限定されているということ」、第二に

「思考の順序と階層を尊重するような仕方で文 (phrase) が構成されていること」、第三に「文のなかで、知的精神的要素が不適切で準備不足な素材 (matière) による障害に遭っていないこと」である³⁰⁾。すなわち、語・文・素材の3つが明晰でなければならないという発想であるが³¹⁾、関西での講演でもこうした点が強調されている。フランス語が「用いることによって思考が明白になる言語 (langage par qui les idées deviennent visibles)」³²⁾として定義されることから講演が始まっていることからしても、それは明らかであろう。

その一方でこの講演では、フランス語は「明晰」であるがゆえに「一般的で客観的な性質」をもつという主張が付け加えられている――

実際、多くの言語には、それらを生み出し使用する民族が生来もつ気質が強く刻み込まれています。言語というものは単に思考を表現するのではなく、ある特定のタイプの人間がその思考についてどのような物理的反応をみせるかを示すのです。例えば、私が英語に対して最も強い賞賛の念を抱くのは、その力強さ、素早く軽快な振る舞い、迅速でシンプルな物事の捉え方に対してです。英語は行動のための言語であって、熟考のための言語ではありません。[...] 反対に、フランス語では、最も客観的かつ抽象的なかたちで思考を言い表すことに、すべてがかかっているのです。[...]

要するに、私が述べたことから、フランス語があらゆる人々の助けになる言語であるのは、思考の表現という難しい役割に最も適した、繊細に構築された言語であるがゆえ、易しいのではなく複雑な言語であるがゆえなのだとすることを、お分かりいただけるでしょう。³³⁾

各言語はそれを用いる人々の気質を反映したものであるという発想により、フランス語には「フランス的精神」が、すなわち「あらゆる局面で一般的なるものについて考え、原因ないし原理へと遡る」³⁴⁾という気質が刻印されていることになる。それゆえフランス語は「熟考のための言語」とされるのだが、それが「行動のための言語」である英語と対比されていることに注目しよう。「日本は今や英米に見放されたせいで孤立し、アジア大陸と太平洋の片隅でロビンソン・クルーソーさながら途方に暮れている」³⁵⁾という認識を、クローデルは再三にわたり表明していた。そして、かかる状況下で日本が探し求めているのは「文明社会の全体に自国を接触させ、自国を理解し、また理解させる手助けをしてくれるような大国」³⁶⁾なのであり、フランスこそがその役目を果たすに相応しいとアピールするのである。英語との対比により、「あらゆる人々の助けになる言語」たるフランス語の利点を訴えるこの論法は、当時クローデルがとって

いた対日政策の戦略に適合しているといえよう。

こうしてクローデルは、フランス語が「明晰」であること、そして「思考の表現」に適した言語であることを示した。だが、講演「フランス語について」の最大の特徴は、こうしたフランス語の特徴から帰結する「国際性」が前面に押し出されていることにある――

ところで、皆さんに注意するまでもないことですが、自らに割り当てられた職務に縛りつけられている単なる機械の歯車であることを好しとしない今日の人間は、ふたつの文化を享受しなくてはなりません。ひとつには自国について、その歴史的使命について、自国が有する資源や必要としているものについてを教えてくれる、国内の文化があります。ふたつ目として、国際的な教養があります。今日、それぞれの国は、自らが孤立して生きているのではなく、大きな集団の一部をなしているということに納得するよう仕向けられています。そして、その集団の内部で重要かつ荣誉ある役割を演じるには、各国それぞれが流通性のある価値あるものを持ち寄り、互いを理解し合い、大きな討論に参加できなくてはならないのだということにも納得しなければなりません。この討論からアイデアが生まれたり、世界を導く力が意識化されたりするのです。

そこで私は、この討論の場にフランス語ほど適した言語はないと申し上げます。³⁷⁾

ここでクローデルが語っているのは、自国の文化に加えて、複数の国が関係し合う「大きな集団」において形成される文化に触れることの重要性である。彼の言う「国際的な教養」とは、各国から持ち寄られた「価値あるもの」が集積され、さらに相互理解に基づく「討論」によって形成されるものであるが、フランス語こそがそうした「討論」の場で使用されるに相応しいというのが、ここでの主張である。クローデルは、一国の枠内にとどまらない「国際性」の重要性を説きながらも、フランス語という一国の言語にそれを代表させようと試みているのだといえるだろう。

実は、これはクローデルの対日政策の根本にある発想であり、1921年12月17日に華族会館で催された日仏協会主催の歓迎晩餐会でも、同様の演説を行っている――

皆さんは次のように感じられたことでしょうか。一個人の文化、一国の文化がどれほど素晴らしいものであっても、その他により大きな一種の市場が、思想の銀行があるのだということ。そこには、世界各国の人々が最良のもの、ときには最悪のものを持ち寄ります。一切の価値が、人間精神のあらゆる相場について容赦なく取引される

試練に耐えます。あらゆる見解が、そこに含まれる豊かなもの、生き生きとしたもの、局地的なものだけでなく人類全体に通ずるものを学びにやってきます。ご存じのように、こうした市場はパリにおいて開かれるのであり、教養ある人間が人類全体と出会えるのはパリだけなのです。この出会いに、より多くの日本の皆さんが加われることを我々は望みます。そのためには、より多くの方がそこで必要不可欠になる道具の使用法、すなわち我が国の言葉の知識を習得されることを望みます。³⁸⁾

注目すべきは、「思想の銀行」、すなわち「国際的な教養」が形成される場所がパリであるとされており、そこでは「我が国の言葉の知識」、すなわちフランス語が必要不可欠であるとされていることである。「国際的な教養」とは、単に各国の文化を寄せ集めただけではない。それらは「取引」され、「人類全体に通ずるもの」が選び出されるのであるから、そこには必然的に普遍性が形成されることになる。それゆえ、フランス語は「国際的」かつ「普遍的」な言語でなくてはならないのだ。

こうしてクローデルは、「国際的言語」たるフランス語の有用性を前面に押し出しながら、聴衆をフランス語学習へと誘ったのであった。外相ポワンカレに送られた関西出張の報告は、次のように締めくくられている――

我が国同様に美的感覚に富み熱心なこの国を精神と知の面から導くにあたって、現在ほどの好機は未だかつてありません。[...] この仕事を成し遂げるには、個人が一時的な熱意をみせるだけでは不十分です。永続的な制度に基づく、たゆまぬ努力が必要です。東京に着任して以来、その設立が私の主要な関心事のひとつであるフランス会館が、我々にとっての土台となることを願っています。³⁹⁾

日仏協会主催の歓迎晩餐会が催された一週間後、12月24日に東京銀行倶楽部でフランス会館（後の日仏会館）設立にかんする会合が開かれ、クローデルも出席した。その後彼は、会館の構想をまとめた「東京フランス会館についての覚書」を作成している⁴⁰⁾。日仏会館設立におけるクローデルの貢献についてはすでに多くの研究があるため詳述を避けるが⁴¹⁾、要するに彼は「思想の銀行」を日本に作ろうとしていたのである。だが、フランス海外事業局長を務めていたジャン・ジロドーに送られた書簡からもわかるように、当時この計画はクローデルの思うように進んでおらず、「この国では何をするにもおそろしく長い時間がかかるのです」と愚痴をこぼしてもいる⁴²⁾。その計画をより強固かつ現実的なものにするため、「フランスの言語と思想を宣伝する一種のセールスマン

(commis-voyageur)』⁴³⁾の役目を買って出て、この講演を行ったのだと考えられるだろう。

同時に、自らの講演に多くの聴衆が集まったのを目の当たりにしたクローデルは、「我々がいささか見捨ててきたこの国において、フランスの威信が今もなおどれほど高いものであるか、そしてフランスの思想動向がこの国でどれほど共感を得られ、熱烈な関心をもたれているか」⁴⁴⁾を肌で感じるようになった。その点では、この関西旅行は「詩人大使」としての自らの影響力を再認識する機会にもなったと考えられよう。

講演「日本の伝統とフランスの伝統」における日本の伝統の「普遍性」

「日本の伝統とフランスの伝統」を読み解くには、そもそもこの講演が行われた「日光夏期大学」という催しが何であったのかを問うことから始めねばならない。その実態は長い間解明されず、「幾世代にもわたり日本のクローデル研究者を悩ませてきた」⁴⁵⁾とも評されるほどだが、『下野新聞』の記事から、当時栃木県に存在した地方新聞である野州新聞社により主催されていたことが明らかになった⁴⁶⁾。「日光夏期大学」が初めて開催されたのは1921年だが、その際「年々開校の筈に就ては之を記念する為記念号発刊の計画」があり、「記念広告」への賛同を求める葉書が同社の足利支局から送られている。そこに「何人を問はず聴講随意」とあることから⁴⁷⁾、一般聴衆の参加を想定した、市民講座のようなものだったと考えられよう。したがって、先に分析した2つの講演がフランスに何らかの関心を寄せる学生や大学関係者に向けられていたのに対し、「日本の伝統とフランスの伝統」はより幅広い聴衆を想定していたと言える。

この講演を依頼したのは、当時早稲田大学の政治学教授を務め、フランス語に堪能であった五来欣造（素川）である。五来はクローデルの関西旅行に同行しており、岡崎公会堂で「仏蘭西思想」と題する講演を行っている⁴⁸⁾。また、それに先立つ3月末に、クローデルは五来を在日フランス大使館の広報活動に登用する意向を本国に報告している。「日本の人々にフランス文化やフランスの主義主張に関心を抱かせるための記事」を定期的に執筆して新聞に掲載させると同時に、「フランスの関心を惹くような青年、学生、インテリ層との関係を強固なものにする」⁴⁹⁾という役割を、クローデルは五来に期待していたのである。

以上の事実を考慮すると、五来はこうした広報活動の一環としてクローデル

に講演を依頼した可能性が高い。じじつ、この講演が実施されたことは、原稿を添付の上でポワンカレ外相に報告されている――

この種の行事は私にとってこの上なく憂鬱であり、慣れていない教育的発表を準備するのは苦痛な仕事です。にもかかわらず、私はこの招待を断るわけにはいかないと思いました。日本におけるフランスの代表者には、影響力を与える手段があまりに乏しいので、いささか素朴な好奇心に由来する要請から逃れる権利などないのです。しかし、そうした要請は、フランスにかんする一切の知識、フランスの歴史、世界でのフランスの立場にこれまで不案内であった若い世代に接触する好機をもたらしてもくれるのです。

そういうわけで、依頼された通り、「フランスの伝統主義 (traditionalisme français)」について話しました。いやむしろ、フランスの伝統と日本の伝統にかんして、私が興味深く感じるいくつかの点を対比させた発表を行いました。⁵⁰⁾

クローデルが依頼された演題は「フランスの伝統主義」であったことが分かる。そして自らが表に立って講演することがフランスに対する若い世代の関心を惹く機会になるという彼の考えは、五来に「青年、学生、インテリ層との関係」の強化を期待していたという点とも整合する。するとこの講演は、「フランス文学について」や「フランス語について」と同様の目的で行われたとも考えられよう。だが、結果としてクローデルは五来からの注文を逸脱し、「日本の伝統とフランスの伝統」という演題を設定した。講演の冒頭で、「友人の五来さんから、皆さんの前でフランスの伝統主義について話をするように言われたのですが、私は少したじろいでいます」と語っており⁵¹⁾、「フランスの伝統主義」⁵²⁾という演題は彼にとって何らかの不都合があったのだと思われる。しかも、「フランスの伝統主義は、込み入った複雑なテーマのひとつであり、立ち入るよりも抜け出す方が難しいのです」⁵³⁾と前置きしたうえで「フランスの伝統」について語り始めたクローデルは、早々にこの話題を切り上げ、「私の考えをより理解していただくために、[...] 比較・対照の方法をとります」⁵⁴⁾と述べ、話題を「日本の伝統」へと移す。たしかに詩人としてのクローデルは、当時「聖ジュヌヴィエーヴの裏を飾る詩——東京の内濠」を執筆しており⁵⁵⁾、日本的な要素を自らの詩作品に組み込もうと試みていた。だが、この講演が大使としての職務の一環であったことを考慮すると、「日本の伝統」について語るという選択がそうした個人的関心にのみ由来するとは考えにくい。

クローデルが「たじろい」だ理由については様々な解釈が可能であるが⁵⁶⁾、ここでは、「日光夏期大学」とは何だったのかという問いに再び立ち返ることから考えてみたい。幸い、雑誌『実業之日本』に掲載された1922年のプログラムを新たに発見することができ、クローデル以外の登壇者がどのような顔ぶれであったのかが明らかになった――

日光夏期大学

8月17日-27日

政治哲学 早大教授 五来素川

経済要義 法学博士 塩澤昌貞

農村社会学 農学博士 横井時敬

地方自治 早大教授 高橋清吾

生活と宗 早大教授 内ヶ崎作三郎

文化主義 文学博士 金子筑水

男女共労の文化 女大講師 小橋三四子

個性と社会性 早大教授 大山郁夫

科外講演 法学博士 高田早苗

実業之日本社長 増田義一

代議士 尾崎行雄

評論家 長谷川如是閑⁵⁷⁾

まず、ここにクローデルの名前がない理由について考えたい。講師のひとりとして名前が挙がっている小橋三四子は、実際には1922年5月11日に死去している。そのため、このプログラムはそれよりも以前に作成された可能性が高い。少なくとも、クローデルの登壇はあらかじめ計画されたものではなかったと考えられる。彼が講演したのは最終日にあたる8月27日であるため、「科外講演」のひとつとして急遽追加されたとも推測できよう。次に、クローデル以外の講演者について、その大半が早稲田大学関係者によって占められていることは注目に値する。「早大教授」の肩書がついた講師は五来をはじめ4名いるが、それ以外にも塩澤昌貞は当時の早大学長であるし、金子筑水も早大で教鞭をとっていた。科外講演の講師に目を移しても、高田早苗は早大初代学長、増田義一は早大の前身である東京専門学校の卒業生である。1909年(明治42年)、早稲田大学は「市民教育もしくは国民教育の理念のもと、広くすべての人のために知識普及活動を行う」目的で「校外教育部」を設置し各地で「巡回教育」を実施

したが⁵⁸⁾、「日光夏期大学」もそのひとつであったと考えられる⁵⁹⁾。また、野州新聞社社長の森下國雄は早稲田大学の卒業生であったため、1921年の第1回夏期大学の講師は全員同大学から派遣されている⁶⁰⁾。

野州新聞社は、「日光夏期大学」を「社会教化事業」として位置づけていた⁶¹⁾。そして、講師として尾崎行雄や長谷川如是閑の名がみえることから、この催しは「大正デモクラシー」と呼ばれる思想潮流を色濃く反映していたと考えられる。早稲田大学から派遣された講師のうち、内ヶ崎作三郎と大山郁夫は、民本主義の学者・思想家からなる黎明会という言論団体の会員であった。そしてクローデルに講演を依頼した五来もまた、黎明会に所属していた⁶²⁾。じじつ、五来は講演当日にクローデルの通訳を務めたが⁶³⁾、五来が訳したと思われる講演原稿の訳文が後に雑誌『改造』に掲載されている⁶⁴⁾。この雑誌が「大正デモクラシー」の昂揚を背景として創刊されたことはよく知られていよう。「伝統主義」には「大正デモクラシー期の日本に伏流していたナショナリズムを養い、温存させた⁶⁵⁾」という側面があるため、こうした「日光夏期大学」の雰囲気にはそぐわないとクローデルが判断した可能性もある。

だが、おそらく五来はフランスの広報活動の一環としてこの講演を企画し、クローデルもその意図は汲み取っていたであろう。だとすれば、なぜ彼は「日本の伝統」にかんする話題を中心にして講演を組み立てることになったのか。注目すべきは、日本について語る際の論法である。クローデルは、日本の自然観や宗教的感情の独自性・特殊性に注目しているように装いながら、その解釈の随所にキリスト教的語彙を散りばめている。例えば、日本が「カミの国 (terre des Kami)」と呼ばれていることに関連して日本の自然環境について記述する箇所では、富士山が「自然が自らの造物主 (Créateur) のために築き上げた、最も壮大なる祭壇」に喩えられている⁶⁶⁾。また日本人の宗教的感情の特徴であるとされる、自然に対する「崇敬」は、「国土とのあいだに交わり (communion) が開かれている状態」であり、自然のなかにあるものすべては「同一の父より作られ、同一の意志の啓示をあらわす」とされる⁶⁷⁾。このように、日本の自然観や宗教観があたかもキリスト教カトリックのそれと地続きであるかのような印象を、クローデルは読者に与えるのである。

そして、「カトリック」の語源に遡るまでもなく、こうしたキリスト教的語彙に彩られた日本の自然観や宗教観は「普遍性」を帯びているということになる。

実際、講演の終盤において問題にされているのは、「日本に特有の宗教的感情が、人類全体のそれとどれほど結びついているのか」であった――

物質面、精神面で失意のどん底にあるような存在、最も墮落した存在を愛するだけでなく、とりわけ称え、尊敬しなければなりません。なぜならそうした存在もまた我々同様に被造物なのであり、神の生きた神殿だからです。この崇高な感情ほどキリスト教的なものはありません。そして、これほどまでに著しく極度に日本的なものもないのだと考えると、嬉しく思われます。⁶⁸⁾

この箇所先立ち、クローデルは「日本国民の心に深く浸透した尊敬の感情」⁶⁹⁾に着目していた。「知性では到達できない優れたものを自然と受け入れること、存在の神秘に対して魂全体が宗教的態度をとること」と定義される「尊敬」は、「〔彼〕にとってとりわけ日本的な態度に思えるもの」であり、日本が「カミの国」と呼ばれる根拠ともされている⁷⁰⁾。だが、講演終盤になって、この「尊敬」の念は「著しく極度に日本的」であると同時に「キリスト教的」でもあるとされる。つまり、ここでは「特殊」と「普遍」とが並び立つことになり、「カミ」と「神」の区別はきわめて曖昧なものになるのである。

こうした一連の論法は、「日光夏期大学」の聴衆が「県下各方面の有識者階級の人々」⁷¹⁾であったことと無関係ではあるまい。彼らの多くはフランスとは何の縁もなかったろうが、社会改造に対する強い問題意識をもった集団であったことは、この催しのプログラムからも明らかである。一方クローデルも、日本における社会改造思潮の高まりを認識し、この国が西洋文明への適合を模索する傾向を評価していた。来日前のインタビューでは、「日本は〔…〕極東において最大の軍事力・海軍力を誇る列強というだけでなく、きわめて古い文明をもちながらも、現代文明に見事に適合した国なのです」⁷²⁾と述べている。また、彼が民本主義の運動について多くを知っていたとは考えにくい、駐日大使として日本の社会状況を具に観察するなかで、選挙権拡大に向けた機運が高まっていることを肌で感じてはいた――

日本国民の政治的無関心はどうあれ、国家が2つの階層に分けられ、その片方である小規模土地所有者だけに政治の権利が与えられているのは、危険とは言わぬまでも腹立たしい状態であるのは確実です。それに加えて、日本人は誰しもが西洋諸国の視線に絶えず晒されているという感覚をもち、遅れをとった文明のしるしとして非難され得るものに対しては、何であれ痛ましく感じるのです。この秘められた感情が、普

通選挙をきわめて熱心に擁護する人々を駆り立てているのだと私は確信しています。⁷³⁾

興味深いのは、日本の普選運動が謂わば西洋からの「外圧」を主たる動機とし、普通選挙制を採用しないことが「遅れをとった文明のしるし」だという意識を日本人が抱いていると見なす点である。当時の日本人が西洋からの視線を強烈に意識していることを、クローデルは巧みに嗅ぎ取っていたのである。

「フランスにかんする一切の知識、フランスの歴史、世界でのフランスの立場にこれまで不案内であった若い世代に接触する好機」となることを期待していたクローデルが、この講演でフランスについてほとんど語っていないのは奇妙に思える。しかし、この講演が実は「日本の伝統」の特殊性だけを賛美するのではなく、それが同時に普遍的でもあり得ることを示して終わっている点に、彼のとった戦略が隠されているのではないだろうか。「フランス語について」で語られていたように、当時の彼の関心は、多様な文化を接触させてそこから「国際的な教養」を生み出すことにあり、そのための「市場」を日本に作ろうとされていた。それゆえ、「国際的」な言語としてのフランス語の重要性を「宣伝」したのである。しかし同時に、日本に対してそうした「市場」への参画を誘う以上、日本の文化がそこで「取引」されるに値することを示す必要があったのではあるまいか⁷⁴⁾。じじつ、この講演は、異なった「伝統」をもち異なった「理想」を追求する諸国民が「全体の調和 (harmonie de l'ensemble)」を生み出し、とりわけ日仏両国の差異が「好感と提携の動機」になるべきだと締めくくられる⁷⁵⁾。これは互いに差異ある特殊な諸存在を普遍へと統合することに外ならず、その点では、クローデルの外交指針に合致しているといえよう。

結 語

本稿では、クローデルが1922年に日本各地で行った3つの講演を取り上げ、それらを同時期に彼がとっていた外交戦略との関わりに注目して読み解いてきた。その過程で明らかになったのは、想定する聴衆の層に応じて話題の選択や論理展開を細かく調整する、有能な外交官としての姿であった。「フランス文学について」では、「詩人」として自らの文学観を語ることよりも、「大使」として今後の対日政策に必要となるフランスの宣伝に注力した。そこで「フランス的精神」の形成を文学史のなかに位置づけることは、フランス文学に強い関心をもつ聴衆にとって説得力があったと考えられる。「フランス語について」で

は、日本における「思想の銀行」たる日仏会館の設立を見据え、フランス語を習得する意義について語られていた。「フランス文学について」の議論を基礎としつつ、そこにフランス語の「国際性」という論点を付け加えることで、必ずしも文学に関心のない聴衆の興味を惹こうと試みた。そして「日本の伝統とフランスの伝統」は、依頼内容から大きく逸脱することも厭わず「日本の伝統」を前面に押し出した内容になったが、それは最終的に日本の特殊性が普遍性へと接続されるに至った。さながら、日本を「思想の銀行」に参画させるための招待状のようであるが、同時に、絶えず西洋諸国からの視線を意識している日本人の自尊心を掻き立てる効果も狙ったものと考えられる。

クローデルは自身が「詩人大使」と呼ばれていることを知っていたはずだが、職業外交官たる彼は、「詩人」の面ばかりが注目されることをあまり快く思っていなかったようである。じじつ、1926年（大正15年）12月6日に大阪ホテルで開催された日仏文化協会総会での挨拶では、「私は大使詩人（l'ambassadeur poète）と呼ばれていますが、詩の領域だけに閉じこもっていたのではありません」と発言している⁷⁶。だが、本稿で分析した講演の効果が、詩人としての名声によってさらに高められたことは疑いを容れない。クローデルが単なる「大使」であったならば、2,000人も聴衆が講演を聞くために押し寄せることはなかったであろう。その一方、これらの講演にはクローデルがまさに「詩人」として取り組んでいた問題も随所で顔を覗かせている。例えば「日本の伝統とフランスの伝統」は、後に大幅な改稿をへて、「日本人の魂への一瞥」と題する日本文化論として『新フランス評論』に掲載されることになる⁷⁷。かくのごとく「大使」としての任務が「詩人」の活動に影響を与えたその他の事例についても、今後いっそうの探究・考察が望まれる所以である。

註

- 1) «Instructions générales destinées à M. Claudel, ambassadeur au Japon», dépêche n° 141, de Briand à Claudel, 9 septembre 1921, Archives du ministère des Affaires étrangères, Centre de La Courneuve, Série-E, Asie, Japon/1. 以下、フランス語の引用はすべて拙訳であるが、既訳がある場合は適宜参照した。
- 2) 「仏国大使更迭 新大使は文学者」、『読売新聞』, 1921年3月21日, 第3面。
- 3) 「新任仏大使来る 近代詩人の本日東京へ」、『東京朝日新聞』, 1921年11月19日, 第5面。

- 4) 滞日期クローデルの文化外交を扱った主要な研究として以下を参照——濱口學「ポール・クローデルの対日外交における『文化的武器』」, 『國學院大學紀要』第48巻, 2010年2月, 141-169頁; Jean-François GRAZIANI, «L'enseignement du français au Japon vu par Paul Claudel durant son ambassade (1921-1927) : jugement, ambitions et réalisations», *Revue japonaise de didactique du français*, vol. 8, 2013, pp. 20-32; Michel WASSERMAN, *Les Arches d'or de Paul Claudel. L'action culturelle de l'Ambassadeur de France au Japon et sa postérité*, Paris : Honoré Champion, 2020.
- 5) Paul CLAUDEL, *Journal*. Édition établie et annotée par François VARILLON et Jacques PETIT, 2 vol., Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1968-1969, t. I, pp. 1325-1326.
- 6) Paul CLAUDEL, «Discours sur la littérature française», in *Supplément aux Œuvres complètes*, Lausanne : L'Age d'Homme, 1990-1997, t. II, p. 106. 以下, 本講演録からの訳出引用にあたっては DLF と略記する。なお, 訳者不明の日本語訳(ポール・クロオデル「仏蘭西文学論」, 『改造』第4巻2号, 1922年2月, 2-11頁)があり, 訳出にさいし適宜参照した。
- 7) 「歓迎の喜びに詩人大使の雄弁 雪後の上野に仏蘭西文芸の特質を説く」, 『東京朝日新聞』, 1922年1月16日, 第3面。
- 8) CLAUDEL, *Journal*, t. I, *op. cit.*, p. 1326.
- 9) DLF, p. 110.
- 10) DLF, pp. 106-107.
- 11) 『詩法』第3章において, 「詩法 (Art poétique)」の語源が「作る (*Poieîn* - faire)」であることが示されている。Voir Paul CLAUDEL, *Œuvre poétique*. Édition établie et annotée par Jacques PETIT, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1967, p. 143.
- 12) DLF, p. 107.
- 13) *Idem*.
- 14) *Idem*.
- 15) DLF, p. 108.
- 16) DLF, p. 111.
- 17) Paul CLAUDEL, «La catastrophe d'Igitur», in *Œuvres en prose*. Édition établie et annotée par Jacques PETIT et Charles GALPÉRINE, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1965, p. 511.
- 18) *Ibid.*, p. 514.
- 19) *Ibid.*, p. 512.
- 20) Michel LIOURE, «“Rêveurs de rêves” dans le théâtre de Claudel», in *Classicisme et modernité dans le théâtre des XX^e et XXI^e siècles*, Aix-en-Provence : Presses Universitaires de Provence, 2020, p. 51.

- 21) Paul CLAUDEL, «Introduction à un poème sur Dante», in *Œuvres en prose, op. cit.*, p. 423.
- 22) «Interview de Claudel par Marcel Pays», in CLAUDEL, *Supplément aux Œuvres complètes*, t. II, *op. cit.*, pp. 97-98.
- 23) Dépêche n° 88, de Claudel à Poincaré, Tokyo, 2 juin 1922, in Paul CLAUDEL, *Correspondance diplomatique Tokyo 1921-1927*. Textes choisis, présentés et annotés par Lucile GARBAGNATI, Paris : Gallimard, coll. «Cahiers Paul Claudel», 1995, p. 147. 本書からの訳出にあたっては、ポール・クローデル『孤独な帝国 日本の1920年代』（奈良道子訳）、草思社、1999年を参考にした。
- 24) *Idem.*
- 25) *Ibid.*, p. 148. 京都帝国大学文学部にフランス文学研究室が設立され、太宰施門が初代教授に着任したのは1925年のことである。
- 26) *Idem.*
- 27) 関西大学訪問の詳細は、『千里山学報』第2号、1922年7月、12-14頁を参照。
- 28) «Sur la langue française. conférence à l'Université de Kyoto», jointe à la dépêche n° 88, in CLAUDEL, *Correspondance diplomatique, op. cit.*, p. 143. 以下、本講演録からの訳出引用にあたってはSLFと略記する。
- 29) DLF, p. 109.
- 30) *Idem.*
- 31) この点については次に詳しい——Emmanuelle KAËS, *Paul Claudel et la langue*, Paris : Classiques Garnier, 2011, pp. 138-153.
- 32) SLF, p. 142.
- 33) SLF, pp. 143-144.
- 34) DLF, p. 107.
- 35) Dépêche n° 61, de Claudel à Poincaré, Tokyo, 3 juin 1924, in CLAUDEL, *Correspondance diplomatique, op. cit.*, p. 270.
- 36) Lettre privée de Claudel à Merlin, Tokyo, 28 février 1924. Archives Nationales d'Outre-Mer, Ministère des Colonies, Nouveau Fond, Indochine/809 : Relations extérieures, Japon (1923-24).
- 37) SLF, pp. 142-143.
- 38) Dépêche n° 152, de Claudel à Briand, Tokyo, 20 décembre 1921, in CLAUDEL, *Correspondance diplomatique, op. cit.*, p. 97.
- 39) Dépêche n° 88, de Claudel à Poincaré, Tokyo, 2 juin 1922, in CLAUDEL, *Correspondance diplomatique, op. cit.*, p. 149.
- 40) Bernard FRANK, Shokichi IYANAGA, «La Maison franco-japonaise, son histoire, ses buts, son fonctionnement», 『日仏文化』第31号, 1974年7月, 8-11頁。
- 41) 主なものに、中條忍「ポール・クローデルと日仏会館設立をめぐる」『日仏文化』第66号, 2001年3月, 5-25頁がある。

- 42) Lettre de Claudel à Jean Giraudoux, 8 mai 1922, in *Cahiers Jean Giraudoux* 13, Paris : Grasset, 1984, p. 119.
- 43) WASSERMANN, *op. cit.*, p. 31.
- 44) Dépêche n° 88, de Claudel à Poincaré, Tokyo, 2 juin 1922, in CLAUDEL, *Correspondance diplomatique, op. cit.*, p. 149.
- 45) Wassermann, *op. cit.*, p. 35.
- 46) 『下野新聞』, 1922年8月18日, 第2面。
- 47) 野州新聞足利支局より小川作太郎宛, 1921年8月。栃木県立文書館「小川大平家文書」, 文書番号136。
- 48) 「仏大使講演」, 『大阪朝日新聞』, 1922年5月25日, 第2面。なお, 当日は慶應義塾教授井汲清治の講演「近代仏蘭西文学の特質」も併せて行われた。
- 49) Dépêche n° 46, de Claudel à Poincaré, Tokyo, 28 mars 1922, in CLAUDEL, *Correspondance diplomatique, op. cit.*, pp. 128-129.
- 50) Dépêche n° 132, de Claudel à Poincaré, Tokyo, 31 août 1922, Archives du ministère des Affaires étrangères, Centre de La Courneuve, Série-E, Asie, Japon/44.
- 51) Paul CLAUDEL, «Tradition japonaise & tradition française», *Bulletin de la Société Paul Claudel*, n° 207, septembre 2012, p. 22. 以下, 本講演録からの訳出引用にあたっては TJTF と略記する。
- 52) 「フランスの伝統主義」とは, モーリス・バレスやポール・ブルジェらの作品に代表される「普仏戦争から第一次世界大戦の戦間期に勃興した文化ナショナリズムの一種」である。村田裕和「仏蘭西学会の設立と伝統主義論争——エミール・エックと太宰施門の第一次世界大戦」, 『比較文学』第50巻, 2008年3月, 97頁を参照。
- 53) TJTF, p. 22.
- 54) TJTF, p. 23.
- 55) Voir CLAUDEL, *Journal, op. cit.*, t. I, p. 553.
- 56) バレスをはじめとする伝統主義者とクローデルの間に強い緊張関係があったこともその一因と考えられる。この点については, 学谷亮「滞日期ポール・クローデルにおける批評と外交の接点——「日本の伝統とフランスの伝統」をめぐる」, 『フランス語フランス文学研究』第119号, 2021年8月, 230-233頁を参照されたい。
- 57) 「今夏開かるる夏期講習会案内」, 『実業之日本』第25巻14号, 1922年7月, 76頁。
- 58) 山寄雅子「早稲田大学校外教育部による地方講習会活動の実態——大正期の秋田県における講習会を事例として」, 『日本社会教育学会紀要』第32号, 1996年6月, 49頁。
- 59) 「早稲田大学校外教育(大正11年度夏期)講師及び講演題」には, この年の「日光夏期大学」講師のうち, 大山, 高橋, 内ヶ崎, 五来, 塩澤の演題例が記載されている。『早稲田学報』第328号, 1922年6月, 17-18頁を参照。
- 60) 「校外教育部消息 日光夏期大学」, 『早稲田学報』第320号, 1921年10月, 16頁。
- 61) 同上。

- 62) 中村勝範「黎明会とその漸進主義」、『法学研究』第59巻12号, 1986年12月, 67-88頁を参照。
- 63) 「早稲田大学教授の五来氏が私の通訳を務めました」(Dépêche n° 132, de Claudel à Poincaré, Tokyo, 31 août 1922, Archives du ministère des Affaires étrangères, Centre de La Courneuve, Série-E, Asie, Japon/44)。
- 64) ポール・クローデル「芸術と宗教より見たる日仏の伝統」、『改造』第5巻1号, 1923年1月, 215-224頁。同号には講演のフランス語原文も全文掲載されている。
- 65) 村田前掲論文, 103頁。
- 66) TJTF, p. 24.
- 67) TJTF, p. 25.
- 68) TJTF, p. 27.
- 69) TJTF, p. 26.
- 70) TJTF, p. 23.
- 71) 「校外教育部消息 日光夏期大学」、『早稲田学報』第320号, 1921年10月, 16頁。
- 72) «Interview de Claudel par Marcel Pays», in CLAUDEL, *Supplément aux Œuvres complètes, op. cit.*, t. II, p. 97.
- 73) Dépêche n° 24, de Claudel à Poincaré, Tokyo, 28 février 1922, in CLAUDEL, *Correspondance diplomatique, op. cit.*, p. 116.
- 74) この点に関連して、当時の日本人が「日本の文学・芸術の理解者になってくれること」をクローデルに期待した背景として、「近代化された西洋にたいして劣った日本という明治以来の格差意識があり、この意識は日本文化が近代的=西洋的な精神に値しないのではないか、という極端な思い込みにまで発展する傾向があった」という大出敦の指摘は興味深い。大出敦「報道に見るクローデル」、『日本におけるポール・クローデル——クローデルの滞日年譜』(中條忍監修, 大出敦・篠永宣孝・根岸徹郎編), クレス出版, 2010年, 435頁。
- 75) TJTF, p. 28.
- 76) «La vie Littéraire et Artistique en Province et à l'Étranger», *Les Nouvelles Littéraires*, 5 mars 1927, p. 6, col. 5.
- 77) Paul CLAUDEL, «Un coup d'œil sur l'âme japonaise», *La NRF*, 1^{er} octobre 1923, pp. 385-401.